

更級への旅

「公民館機関誌『さらしな』は文化村更級の心臓として誕生しました。紙面は広くなくても、走っている文字は血管です。文字は小さくても、含まれているものは血液です。養分です。…」

先の戦争後の一九四八年に発刊された館報「さらしな」創刊号の一節です。初代館長の田崎一路さんが記したものです。更級村が戸倉町、五加村と合併する一九五五年まで毎月発行されました。その内容の充実ぶりに驚きました。

▽テレビ欄がないだけ

「長野県公民館活動史」によると、文部省が公民館構想をつくり、戦争を繰り返さないために国民の自立の基盤となることが公民館に期待されました。館報は村の十代、二十代の青年（女性を含む）がボランティアで編集委員として参加していました。

公民館報に見る更級村の勢い

館報さらしなも、その議論による紙面づくりは村の広報としての役割を担い、また批評精神も豊かで日刊新聞的な性格もあつたようです。村の暮らしをみんながよくしようという意気込みが形に、また表現につながっていました。取り上げる分野は政治、行政、文化、産業、家庭、教育、芸能、社会まで、新聞とほとんど同じで、ないのはテレビ欄ぐらいと言えるほどのことです。

戦後から合併までの更級村の社会情勢、産業、風俗がよく分かり、村民の名前もたくさん載っています。更級村の情報の宝庫ともいえるものをいくつか紹介します。

▽マッチを配って

一つは更級村公民館が「北信館報コンクール」を主催した、との一九五一年二月十五日号の記事です。更級村公民館は優良公民館として世間に知られていたことから、五十号発行記念として、長野市を含む北信の一市六郡に参加を呼びかけました。

館報さらしなは毎月、B4サイズ四

ページからなっていました。一面をこのコンクールの特集に当て、「公民館活動の実態が紙面にあらわれているか」などの審査要領大綱や入賞館報の審査評などさまざまな記事が盛り込まれています。「二」等は古里村公民館（現長野市古里地区）で、「二」等は上山町公民館。更級村公民館は主催者ということで選考の対象には加わらなかったようです。

次に更級村青年団が県のモデルとして認められ、青年団運動を啓蒙する「幻燈」制作に協力したという翌五二年十月十日号です。この「幻燈」というのは今で言うスライドのことでしょうか。今も残っているのならばぜひ見てみたいものです。

更級村の公民館活動の勢いを第三者の目で記したのも見つけました。五二年三月発行の埴生町（旧更級市、現千曲市）公民館報で、更級村公民館

の視察記が載っています。

取材者は当時の中村信一郎館長にインタビューし、▽戸倉上山田温泉に近いので県がやたら視察を向けてよす▽特別にたいしたことをやってるとは思っていないという話を紹介しています。また、「データ」として「更級村公民館の予算は豊かな経済力を反映して断然他を圧し、昭和二十六年度最終予算は六十一万円（埴生町は三十一万



年」。さらに「何と言って青年学級婦人学級が大きく、館報も予算七万で毎月千六百部を発行と記しています。今となってはほほえましい施策ですが、公民館に限らず各種会合の出席時を村民に守らせるため、定刻の出席者にはマッチを配り、実際に遅刻者を

地域新聞として戦後を記録

故人を慕う

明治二二二年に、羽原村、須坂村が合併して以来、その歴史をたどる。特に村内の故郷の方々に依頼した更級村の歴史をまとめた。編纂者がひろつた村の歴史の片りんを挙げてみた。

由緒ある更級

更級村の歴史をたどる。特に村内の故郷の方々に依頼した更級村の歴史をまとめた。編纂者がひろつた村の歴史の片りんを挙げてみた。

減らしたと記しています。更級村の図書室には本が二千冊あつたそうです。

▽感動的な合併特集号

館報さらしなから芸能のエピソードも一つ。公民館が「更級小唄」を村民から募集し、一九五三年一月十日号に入選作が載っています。県の社会教育課主事らが審査し、優秀がつけがたいとして三人の方の作品が選ばれました。ここでは「一」区金井幸雄さん「ものを掲載します（四番までありますが、スペースの関係で申し訳ありません）。

- 一、おらがじまんあの月がチヨイト出ました冠着に空のお月様まんまるで角もたたねば添いよかる
- 二、おらがじまんのこのリンゴチヨイトごろんよすすなりだ顔もつやつや器量よしやがて都へおよめ入り
- 三、おらがじまんの湯の煙りチヨイト八王子来てごろん千曲へだててひとながめネオンきらめく湯の町をエーソウダヨキテゴロン

館報の記事は「作曲、振り付けは追って決める方針」と書いています。その後どうなったのか知りたいものです。館報さらしなの名前は戸倉町などとの合併で消え、館報「とぐら」に吸収発展します。合併特集号（写真左）は感動的です。期待と寂しさが交差しているように感じます。

▽お互いに若かった

戸倉史談会の機関誌「とぐら」第十一号（昭和六十年十二月発行）には、公民館主事の高松政光さんが寄せた文章がありました。「あの頃、公民館で深夜まで編集作業や、文化、政治を論じ、疲れるとちよつとパイと温泉に足を向けたり、お互いに若かった」そして「活躍した若手も年をとり、髪に白さを増している」人として次の方々のお名前を紹介しています。

元戸倉町議長の高村元一さん、元県会議員の大谷秀志さん、元更級村公民館副館長の西沢勝美さん、元農協理事の高松治一さん、元戸倉町長の豊城麟太郎さん、弁護士西沢仁志さん、佐良志奈神社宮司の豊城直祥さん、信越明星会長の太谷善教さん…（肩書きは当時のものあります）

発行 二〇〇五年 八月二十七日
編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮二八四・六
（旧更級郡更級村）

